

自由研究発表

賠償建築としてのホテル・インドネシア  
The Hotel Indonesia, an Architecture of Reparation

山下嗣太（コーネル大学）  
YAMASHITA Tsuguta (Cornell University)

本報告は、1962年にジャカルタに完成したホテル・インドネシア（HI）を、インドネシアと日本の外交史、都市史、建築史に位置付けて考察する。1950年代のジャカルタでは、ホテルが、首都機能拡張のために急増した公務員や軍人のための宿泊施設として使われ、その不足が問題化していた。増加しつつあった観光客の宿泊、また外国要人訪問時の宿泊や国際会議の場所として、インドネシアを代表する国際ホテルが求められた。そこで HI が、スカルノによるタムリン通りを中心としたジャカルタ美化の一環として計画され、1962年のアジア競技会の開催に合わせてその工期が設定された。

HIの工事は国立建設会社である **Pembangunan Perumahan (PP)** が担当し、PPへ技術支援をしていたアメリカの建築家が基本設計を、大成建設が実施設計と施工における技術支援を行った。また、戦後賠償を担保とした延払輸出プロジェクトとして、建材、建設機械や調度品も日本が契約した。HIは、戦後復興や高度経済成長により産業的地位を確立させていた1960年前後の日本の建設業にとって、海外進出のマイルストーンとなった。運営面では、パンアメリカン航空の子会社である、インターコンチネンタルホテルズがマネジメント契約をした。パンアメリカン航空はハワイやグアムを経由する太平洋路線をジャカルタまで延長し、インドネシアはこれらの地域と共に環太平洋の熱帯観光地という地理的想像に取り込まれた。

本報告は、外交史料やオーラル・ヒストリーに基づき、プロジェクト成立の外交的条件、設計、建材流通、工事、完成後の空間体験や催事を総合的に分析する。それによって HI を、スカルノによる指導される民主主義、日本産業の海外進出、アメリカによる環太平洋地域の観光促進といった冷戦期の政治経済的企図の結節点として論じる。